

Kamal Kisan

 インド (南アジア)

インド小規模農家の事情に合わせた農業機械の開発

2

問題を
ゼロに



9

産業と技術革新の
基盤をつくらう



12

つくる責任
つかう責任



インドは世界有数の農業国であり、農業機械の輸出においても世界市場で大きなシェアを占めているにもかかわらず、国内の小規模農家の機械化率は低い。そのギャップに着目し、小規模農家に合わせた農業機械の設計・製造を行い、生産性を高めている事例である。



背景にある社会課題

- インドは世界3位のトラクター製造国だが、国内でトラクターを使っている農家は2%に満たない。
- インド農家のうち83% (およそ8千万人) は農業機械の恩恵を受けていない。

ビジネスモデルと製品の特徴

- 同社はインドの小規模農家をターゲットとした農業機械の設計・製造を行っている。インドの伝統農法や農業スタイルに合わせることで、農家にとって使いやすい製品となっている。
- メンテナンスは誰でもできるようにするなど持続可能性を重視している。

SDGビジネスへのアプローチ

- 小規模農家との対話を繰り返すことで製品コンセプトを練り上げている。同社の製品デザインには「小規模農家での使用に適している」「燃料への依存度が低い」「セルフメンテナンスが容易でアフターサービスへの依存度が低い」「既存の伝統農作業と統合されており導入障壁が低い」「コストパフォーマンスに優れている」「モジュール式であり、一台で多用途に対応できる」という特徴がある。
- 実際に農業生産性を高めている。従来のプランターでは4人の労働者が1日がかかりでおこなっていた1エーカーの野菜の植え付けを、1人の労働者が4時間で済ませられるようになった。またマルチレイヤーでは、フィルムを敷く作業に必要な人数を1/5に減らした。

SDGsへのインパクト

- これまで10種類以上の製品を開発し、インド国内の30,000世帯の農家の機械化に貢献した。
- 製品導入を通じて、平均して労働コストを50%、総栽培コストを10-30%、水の使用量を50-80%削減した。

成功のポイント

- ① グローバルな規格の製品ではミスマッチが起こっている (取り残されている) ターゲットに着目し、対話を繰り返すことで、現地ニーズに合った製品を作り上げた。
- ② 全てを自社ネットワークに取り込もうとするのではなく、例えばメンテナンスは、どの村の業者でもできるように、シンプルな設計とするなど、開放性を重視した事業展開。

